



わたしを拗らせるもの一廬隠、琦君、三毛の苦悩表現一

鄭, 洲

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2023-03-25

(Date of Publication)

2027-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第8518号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482266>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文内容の要旨

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

わたしを拗らせるもの

——廬隠、琦君、三毛の苦悩表現——

氏 名 : 鄭 洲

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程文化構造専攻

指導教員氏名 (主) 濱田 麻矢 教授

(副) 緒形 康 教授

(副) 朴 鍾祐 教授

(注) 4, 000字程度(日本語による)。必ずページを付けること。

本論は、中国語圏近現代文学における女性作家の苦悩描写について検討するものである。考察の対象は五四時期の廬隱（1899～1934）、台湾の第一世代外省作家である琦君（1917～2006）そして第二世代の三毛（1943～1991）である。政治体制などを越えた上で、女性作家たちがどのような理由で苦悩したのか、またその苦悩をどのように言語化したのか、何かの異同点、関連性があるのかといった問題について考えてみたい。本論は五章で構成している。各章ごとに、簡単に紹介する。

序章において、まず三人の女性作家が共通する一人称語りと苦悩することという二つの角度から三人の特徴を検討している。まず、五四時期に遡り、近現代文学の自己表現の発生を概観した。五四新文化運動の勃興に伴い、個人主義の思想が流行し、文学革命に直接に影響を与えるようになると、新文学は形式から内容まで多岐にわたって変化した。最も特徴的だったのは、一人称形式の語り手「我」の文学の出現である。主観的な感情を表現するのを重視する新文学は、読者への感化を基準とし、郁達夫の「沈淪」（1921）のような、散文と小説の間の境界線が攪乱された作品が歓迎された。廬隱は郁達夫と類似した作風をもっており、自伝的作品において感情を一気に吐き出すのが特徴である。琦君は散文創作を主としているが、彼女の散文には強い叙事的な傾向が見られる。三毛は、ドラマチックなストーリーであっても、作品の主人公＝語り手の「私」という作品のノンフィクション性を強く主張している。次に、三人が生きていたそれぞれの時代背景と結びつけた上で、彼女たちの苦悩と女性意識についての創作との関係を明らかにした。廬隱の苦悩には時代の影響が強く影を落としており、母との葛藤が根源的に存在していたが、女性意識の強い廬隱の作品が多く反映したのは、新旧交代時期において彷徨う女性の苦悩であった。琦君の場合、自らが養女だったことや、多妾家庭で舐めた辛酸がトラウマとなっており、創作をし続けることによって乗り越えようとした原点とも言える。青年時代の琦君は廬隱に深く影響されていたが、台湾に渡った後の琦君からは以前の叛逆性は、政府のイデオロギーと「溫柔敦厚」の彼女の創作方針の中で消えたようだった。しかし、その潜在する叛逆性があったからこそ、彼女はトラウマに迫り続けることができたと考えられる。三毛は中学校の時に、数学の先生の体罰を受けて不登校になり、家で七年間引きこもった。しかし、彼女をさらに傷付けたのは、家父長制を内面化した厳父と慈母の無理解だった。そこで感じた深い罪悪感、三毛が一生負ったトラウマとなり、彼女の文学の人生はそこから始まった。彼女は広汎な読者を得るため、あえて中性的な漫画の人物「三毛」をペンネームにし、政治や性別などの議論から逃れたが、放浪者としての三毛はやはり多くの女性を鼓舞している。

第一章は、廬隱の石評梅の悲恋をモデルにした長編小説『象牙戒指』を取り上げ、小説における北京描写と女主人公沁珠のモダン行為に着目し、小説から読み取る不徹底性を検討するものである。北京の部分では、まず廬隱は新式知識人が出入りする場所を小説に取り入れ、彼女が北京のモダンさ、ロマンな雰囲気意識的に醸し出そうとしたことを明らかにした。次に、北京が「灰城」と呼ばれていることに着目し、「灰城」は石評梅、陸晶清、廬隱三人の間に憂鬱と北京への愛憎相半ばする感情を表す語として用いられていることをつきとめた。モダンな空間と「灰城」がもたらす憂鬱さとが織り交ぜられている不

徹底な雰囲気が出小説の背景となっている。モダン行為の部分では、女主人公沁珠の恋愛の失敗とその後の行動、特に喫煙を中心に検討した。世間の視線を無視し、恋愛の神聖性を信じ、既婚者との事実婚を選んだ盧隠や許広平と異なり、沁珠はいわゆる新女性になりきれなかった。男の妻から手紙をもらった時、沁珠は侮辱されたと考えて傷つき、少女としての自我が目覚めた。しかし、この自我は貞操観念に染められている。彼女を苦しめたのはこのような不徹底性だった。「純潔な自我」を守るために沁珠は多くの男と交際し、モダンガールのように振る舞い始めた。しかし、モダンガールを象徴する女性の喫煙行為は、盧隠が描いた沁珠にとっては、単に内心の苦悩に対抗する手段に過ぎない。この点は沁珠の全てのモダン行為に共通している。他人からは、物欲に溺れている沁珠はモダンガールに見えるが、しかし彼女自身がそれを楽しんでおらず、単にどうすべきなのか分からない苦悩の中でもがいているだけだった。つまり、彼女は穆時英たちが描いている魂のないモダンガールにもなりきれなかったのである。沁珠は恋愛から死まで不徹底のままだった。これは目覚めた沁珠、石評梅、盧隠たち近代女性の歴史中間物としての悲劇だった。小説の最後に、北伐が成功し、北京は北平に降格し、「灰城」を離れようとした沁珠はそれを果たせないまま都ではなくなった「灰城」と共に亡くなるように描写されている。盧隠は意図的に街と少女を運命共同体として作り上げ、不徹底の中に世紀末の雰囲気を漂わせる、退廃的な寓話を作り上げたのである。

第二章は、近代以降の女性作家は自分が育った多妾家庭をどのように回顧したのか、台湾女性作家琦君の散文を例に考察したものである。琦君による二姨太の描写が憎悪感と親近感の間を揺れ動いたことに目を留める。二姨太は作者自身の幼少期のトラウマ体験に決定的な作用を及ぼした人物だった。自らのトラウマに迫るために、琦君にとって二姨太を描くことは不可避であったのである。琦君と同世代の女性作家たちは、自らの家庭の妾問題については基本的に口を閉ざしてきた。清末民初の世論は、妾とは憐憫されるか憎悪されるかという二つのパターンで語られることがほとんどであったし、近代的家族観の見地からは蓄妾者である家父長も批判の対象とされたからである。妾を題材としたばかりか、妾に揺れ動く多面性を付与したことは、従来の家族描写を突破した琦君独自の功績であったと言える。散文のテキストにおいて、一貫した呼称と人格をもつ他の人物と異なり、二姨太のイメージは揺れ動き、また彼女だけは様々な呼称で描かれている。そこで呼称を手掛かりとして時系列で追ってみると、そのイメージは単なる恨みの対象からより豊かなものに変わってはいくが、決して単なる肯定的人物に変じたのではないことが分かる。そのイメージを三つに分けて分析した。一つは、父の妾としての庶母、「娘娘」、姨娘という否定的人物から、次第に琦君が好感をもつことになるまでを述べる。次に、モダンガールとして肯定的に描かれる人物像二媽をとりあげ、近代教育を受けた女性というアイデンティティをもっていた琦君が二媽に共感をもつ様子を追う。最後に、二姨太が家族として「長輩」と称されたこと、それによって二姨太が父の妾としての身分から解放され、母などと同じ地平の家族の一員として受け入れられたことを述べる。さらに、二姨太のイメージの変化を父と母との三角関係に位置付けて明らかにした。二姨太のイメージが変化すると共に、肯定的に描かれていた父のイメージに比較的否定的な側面が仄めかされていく。琦君が自らのトラウマの理由を究明し続けた結果、悲劇の原因を作ったのは妾ではなく父権であるという結論にたどり着いたのである。最後に、二姨太のイメージが揺れ動く理由を

確認した。養女であった琦君は比較的冷静な目線を持っていた。彼女は過去の二姨太に対する自らの既成観念を覆し続けることによって、従来の「憐憫・憎悪」というステレオタイプを超越し、人間味溢れる新たな二媽、「長輩」を作りあげた。トラウマの根源を探る過程で、琦君は新たな過去だけでなく、新たな家族像をも構築したと言える。

第三章は、三毛のサハラ時期の作品を分析したものである。異国を放浪する明朗な女性として描かれた「私」＝「三毛」は、当時の読者に熱狂的に愛された。しかし、その「私」は、四つの創作時期によって作品内での呼称を変えている。「三毛」時期を除いた他の三つの時期の「私」は全て憂鬱な人物として造型されていた。憂鬱の根源は、三毛が七年間の引きこもりでできたトラウマの反映だったと思われる。本章では、まずサハラ時期の三毛が自己像の表現に用いた「カカシ」と「流血」という二つのイメージを分析した。「カカシ」は、三毛が自らを象徴する姿としてしばしば用いられてきた。本章では、主に『稻草人手記』の序言と「溫柔的夜」、そしてカカシと関連する「空心人」が現れる「江洋大盗」の三作品に絞って検討した。「カカシ」は直面できない現実と衝突する時に用いられており、自らの無力感を表している。次に「カカシ」と同じく、「死果」と「五月花」二つの作品の分析から、三毛は自分が抱えた理想が現実とぶつかって破綻した時の苦痛を、下半身からの流血という流産を連想させる表現で示していたことがわかった。さらに「石頭記」では、波に巻き込まれて溺れそうになった臨死体験が書かれた。それは絵を描くための石を拾いに海辺へ行った時のことだと後に明かされる。三毛の描いた絵とは、環境としてのユートピアに「不愉快」な魂が閉じ込められているものだった。「石頭記」で、幻想の中で空へ浮かんでいった石が語る言葉は、三毛の処女作「惑」のヒロインが幻想の中で聞く歌と類似しているが、これはどちらも『紅樓夢』で賈宝玉が俗世間を去る前に歌った歌を思わせる。「惑」にしても「石頭記」にしても、結末で幻想の世界へ引き込まれてしまいそうになる描写は、三毛にとっての文学の原点である『紅樓夢』の結末を連想させるのである。「石頭記」での臨死体験は、現実から離脱した虚無に誘惑され、引き込まれそうになっている恐怖を表現しているのだろう。魂がない抜け殻のようなカカシと下半身からの流血は、死亡や虚無感を思わせる表現である。作者三毛が、自らの矛盾をイメージ化し、自分をテキスト内で抜け殻同然に追い込んで臨死させたのは、一種のカタルシスだったと考えられる。サハラ時期以前、思春期に書かれた「惑」に登場する引きこもりの時期の軟弱で憂鬱な少女の影は、三毛の作品には一貫して存在し続けていた。このような矛盾した自己像こそが、三毛の文学を作り上げたと言える。特にサハラ時期には、その矛盾し苦悩する自己を隠蔽し粉飾するため、全く逆の理想像が作り上げられた。カカシや流血などのイメージは、サハラ時期の三毛が理想像「三毛」を作り上げる限界に達した時、はからずも露呈した衝突の一端だったのである。

終章では、各章の考察を通して獲得した成果を総合的にまとめた上で、今後の課題を提示する。

論文審査の結果の要旨

氏 名	鄭 洲
論 文 題 目	わたしを拗らせるもの——廬隠、琦君、三毛の苦悩表現——
要 旨	
本論は、中国語圏の近現代文学における女性作家の苦悩描写について検討するものである。考察の対象は五四時期の廬隠（1899～1934）、台湾の第一世代外省作家である琦君（1917～2006）そして第二世代の三毛（1943～1991）。政治体制を越え、女性作家たちがどのような理由で苦悩したのか、またその苦悩をどのように言語化したのか、何かの異同点、関連性があるのかといった問題について全五章で論じられている。 序章は、三人の女性作家に共通する一人称語りと苦悩という二つの角度から特徴を検討する。五四時期以降、主観的な感情の表現を重視する新文学が生まれ、郁達夫「沈淪」（1921）のような、散文と小説を攪乱するような作品が歓迎された。廬隠は郁達夫と同じく、自伝的作品において感情を一気に吐き出すのが特徴である。琦君は散文創作を主としたが、そこには強い叙事的な傾向が見られる。三毛は、ドラマチックなストーリーでも、作品の主人公＝語り手「私」というノンフィクション性を強く主張している。また、三人それぞれの時代背景は、彼女たちの苦悩と女性意識についての強い関連を持つ。廬隠の苦悩には時代の影響のほか、母との葛藤が根源的に存在しており、彼女の作品の多くは、新旧交代時期において彷徨う女性の苦悩を反映していた。琦君の場合、自らが養女だったことや、多妾家庭で舐めた辛酸のトラウマが創作の原点だと言える。青年時代の琦君は廬隠に深く影響されたが、渡台後の創作からは以前の叛逆性は消えたようだ。しかし、潜在する反逆性があったからこそ、彼女はトラウマに迫り続けることができたと考えられる。三毛は中学校の時に体罰を受けて不登校になり、家で七年間引きこもった。しかし、彼女をさらに傷付けたのは、家父長制を内面化した厳父と慈母の無理解だった。そこで感じた深い罪悪感がトラウマとなり、彼女の文学創作もそこから始まった。彼女はあえて中性的な漫画の人物「三毛」をペンネームにして政治や性別などの議論から逃れたが、放浪者としての三毛はやはり多くの女性を鼓舞している。 第一章は、廬隠が親友・石評梅の悲恋をモデルに描いた長編『象牙戒指』を取り上げ、小説における北京描写と女主人公沁珠のモダン行為に着目し、廬隠の作風である不徹底性を検討した。まず、廬隠が北京のモダンさ、ロマンチックな雰囲気意識的に醸し出そうとしたことを明らかにする。次に、その北京が「灰城」と呼ばれていることに着目し、「灰城」は石評梅、陸品清、廬隠三人の間で憂鬱と北京への愛憎相半ばする感情を表す語として用いられていることをつきとめた。モダンな空間と「灰城」がもたらす憂鬱さとが織り交ぜてられている不徹底な雰囲気は小説の通奏低音をなす。次に、女主人公沁珠の恋愛の失敗とその後の行動について、特に喫煙を中心に検討した。世間の視線を無視し、恋愛の神聖性を信じ、既婚者との事実婚を選んだ廬隠と異なり、沁珠はいわゆる新女性になりきれず、恋愛感情と旧来の貞操観念との間で苦しむ。このような不徹底性から自我を守るため、沁珠は多くの男と交際し、モダンガールのように振る舞い始めた。しかし、モダンを象徴する喫煙行為は、沁珠にとっては単に内心の苦悩に対抗する手段に過ぎない。この点は沁珠の全てのモダン行為に共通している。他人からは、物欲に溺れている沁珠はモダンガールに見えるが、しかし彼女自身はそれを楽しむことなく苦悩の中でもがいているだけだった。つまり、彼女は新感覚派が描くような悩みのないモダンガールにもなりきれなかったのである。沁珠は恋愛から死まで不徹底のままだったが、これは石評梅や廬隠のような近代女性の、歴史中間物としての悲劇でもあった。小説の最後では北伐が成功し、北京は北平に降格する。この「灰城」を離れようとした沁珠はそれを果たせないまま「灰城」と共に亡くなるように描写されている。廬隠は意図的に街と少女を運命共同体として作り上げ、不徹底の中に世紀末の雰囲気漂わせる、退廃的な寓話を作り上げたのである。	
主査記載 氏名・印	潘 大 庭

第二章は、自分が育った多妾家庭を女性作家はどのように回顧したのか、台湾女性作家琦君の散文を例に考察したものである。本章では、琦君が父の二姨太（二番目の妾）の描写が嫌悪と親近感の間を揺れ動いたことに目を留める。二姨太は作者の幼少期のトラウマ体験に決定的な作用を及ぼした人物だった。自らのトラウマに迫るために、琦君にとって二姨太を描くことは不可避であったのである。琦君と同世代の女性作家たちは、自分が育った家庭の妾問題については基本的に口を閉ざしてきた。清末民初の世論は、妾とは憐憫されるか憎悪されるかという二つのパターンで語られることがほとんどであったし、近代的家族観の見地からは蓄妾者である家父長も批判の対象とされたからである。妾を題材としたのみならず、妾に揺れ動く多面性を付与したことは、従来の家族描写を突破する琦君独自の功績であったと言える。琦君散文において、他の人物が一貫した呼称と人格をもっているのと異なり、二姨太のイメージは揺れ動いていた。また、彼女だけは様々な呼称で描かれているのは注目に値する。呼称を手掛かりとして時系列で追ってみると、そのイメージは単なる恨みの対象からより豊かなものに変わってはいくが、決して単なる肯定的人物に変じたのではないことが分かる。そのイメージを、父の妾という否定的人物、モダンガールとして肯定的に描かれる人物像二媽、父の妾としての身分から解放され「長輩」と称された老後の三つにわけて分析した。また、琦君がトラウマの理由を究明し、二姨太のイメージを変化させた結果、悲劇の原因は妾ではなく父権であるという結論が導きだされた。琦君は二姨太に対する自らの既成観念を覆し続けることによって、従来の「憐憫・憎悪」というステレオタイプを超越し、人間味溢れる新たな二媽、「長輩」を作りあげた。琦君は新たな過去だけでなく、新たな家族像をも構築したと言える。

第三章は、三毛のサハラ時期の作品を分析したものである。異国を放浪する明朗な女性として描かれた「私」＝「三毛」は、当時の読者に熱狂的に愛された。本章では、サハラ時期の三毛が自己像の表現に用いた「カカシ」と「流血」という二つのイメージを分析する。三毛が自らを象徴する姿として用いた「カカシ」は、直面できない現実への衝突と、自らの無力感を表している。また三毛は、理想が破綻した時の苦痛を、下半身からの流血という表現で示していた。さらに散文「石頭記」で、幻想の中で石が語る言葉は、三毛にとって文学の原点である『紅樓夢』の結末を連想させる。魂がない抜け殻のようなカカシと下半身からの流血は、死亡や虚無感を思わせる表現であった。作者三毛が、自分をテキスト内で抜け殻同然に追い込んで臨死させたのは、一種のカタルシスだったと考えられる。サハラ時期以前の軟弱で憂鬱な少女の影は、三毛の作品に一貫して存在し続けていた。サハラ時期には、その矛盾し苦悩する自己を隠蔽し粉飾するため、三毛は全く逆の理想像を作り上げた。カカシや流血などのイメージは、サハラ時期の三毛が理想像「三毛」を作り上げる限界に達した時、はからずも露呈した衝突の一端だったと結論づける。

終章では、各章の考察を通して獲得した成果を総合的にまとめた上で、今後の課題が提示されている。

本論文では個別の問題分析は三章にとどまっており、量的に充実したものとは言い難い。三人の作家を貫くとされる「苦悩」の性質も互いに異なるものだし、この苦悩が性別に由来するものであることの論証も充分にはなされていないようだ。

しかしながら、各章における作家の「苦悩」分析は従来の作家研究から確かに一歩踏み出したものであり、そこには執筆者のオリジナリティを充分に見てとることができる。廬隠にとっての北京と友情、琦君が綴った父の妾、恐れを知らない冒険者として自己塑像していた三毛にまつわる陰影など、どれも新しい発見に満ちており、中国語圏の女性作家研究において資するところは小さくない。上記の評価に鑑み、本論文委員会は、論文提出者・鄭洲氏が博士（文学）の学位授与にたる資格を有するものと判断した。

審査委員

区 分	職 名	氏 名	区 分	職 名	氏 名
主 査	教授	濱田 麻矢	副 査	講師	早川 太基
副 査	教授	朴 鍾祐	副 査	立命館大学・ 教授	王 須祐介
副 査	京都大学・ 准教授	津 宇 陽			